

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・親子が広場を訪れやすくなるために、養育者だけでなく様々な世代の方への周知活動を積極的にすすめる。 ・利用者同士が互いに育ち合う場づくりのために、今後もスタッフの意識の向上と広場運営の工夫に取り組んでいく。	A	B
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	B
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		B	B
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		B	B
☆妊娠期から訪れる場として、認知されており、産後の地域での育児支援を知るきっかけとなっている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)
 利用者数;H28年度39,310名 H29年度40,207名 H30年度49,789名
 年間新規登録数;H28年度2,415名 H29年度2,161名 H30年度2,385名
 プレママ・プレパパ利用者数 H28年度423名 H29年度407名 H30年度539名
 外国にルーツのある親子H28年度383組 H29年度548組 H30年度859組
 区のアンケート:「親子でよく利用する場所」は公園20%、地域ケアプラザ10%、地区センター9%

①訪れる人が、いつでも気軽に立ち寄る事ができる雰囲気づくりに努めた。
 利用者のニーズと安全面に考慮しつつ、居心地の良いひろばづくりを心がけた。
 サテライト開設にあたり、利用者が安心して利用できるよう拠点に似せた施設作りを進め、今まで培ってきた土台の基にスタートさせた。その上でサテライトの特徴を生かした新しい取り組みも行った。

②国籍、性別、世代、子育て状況、子育て観の多様化を理解・配慮し、また受容する事に努めた。

③スタッフは親子の様子に気を配り、また様々な養育者の生の声を聞き、そこから新たな事業の企画、展開につなげている。
 毎年利用者アンケート調査を行い、そこから見える親子の現状を区との定例会やネットワーク連絡会などで発信した。

④子どもたちが発達段階に適した遊びに出会い、養育者が様々な子どもの姿や子育てを間近に見て、気づきを得ることができるひろばづくりを心がけた。
 ☆両親教室、母親学級において、拠点の7つの機能を説明し、妊娠期のプログラムの広報を行った。

評価の理由(区)

①地域で得られた声を拠点へ伝え、拠点が行う様々なひろば企画等について共に考え、養育者が利用しやすい居場所づくりを検討した。区アンケート結果を踏まえ、更に工夫ができるよう検討する。

②多様な世代・家族構成・国籍の親子に対して居やすい場になるように、拠点と共に検討している。

③拠点が、ひろば事業のみならず、他事業も通じて把握したニーズやスタッフ間で共有した内容を、定例会で拠点と共有している。

④拠点と共に、ひろばにて養育者向け講座を企画・実施した(妊婦向け予防接種講座、健康講座)。
 ☆妊娠届、転入届、健診時、訪問時、教室開催時などあらゆる機会において積極的に拠点を紹介してきた。両親教室で拠点のスタッフによるPRIによって妊婦の利用につながったり、双胎の妊婦へは拠点の企画を個別に案内するなど工夫をした。

拠点事業としての成果と課題

(成果)
 ・妊娠期から拠点周知に取り組むことで、多様な親子の利用につながった。
 ・養育者の声や区が持つ情報からニーズを把握し、拠点の企画に対し一緒に検討している。
 ・拠点、サテライトそれぞれの特徴を生かしたひろば作りを行った。

(課題)
 ・より良いひろば運営となるよう、養育者の声の把握とスタッフ一人ひとりの能力向上に取り組んでいく。
 ・ひろば利用期間が短くなっている中でも子育ての情報や知恵を伝え、親も子も育ち、就園後も利用できる場となるよう取り組む。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区子ども家庭支援課や関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・相談機能のさらなる向上を目指して、拠点内での連携やスタッフ間の振り返り作業を積み重ねていく。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。	・関係機関との連携に関しては今後も継続的な話し合いを続け、それぞれの役割を果たしていく。	A	A
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <p>相談数 H28年度3,054件→H30年4,462件 例年0才児の相談者数が多く、全相談数の半分近くを占めている。またその内容は①生活習慣②自分自身のことについて③発育発達の順にそれぞれ約30% 祖父母(H28年17件→H30年32件)と外国の方(H28年14件→H30年43件)の相談が増加 相談員への相談→H30年度 臨床心理士:47件、助産師:38件、発達心理士:31件、保育士:25件、保健師:18件 区アンケートより拠点を利用する目的のうち、「相談する」は5%、「子育ての相談を利用したことがある」は36%、「相談しやすい」は88%</p>			
<p>①温かく迎え入れ、養育者にはいつでも相談できることを伝えている。 相談したいがきっかけを作ることが難しい養育者には、相談プレート(*)を用意するなどの工夫を通じて相談しやすい環境づくりに取り組んだ。(※手に握りこめるサイズの細長い小さなプレートで、洗面台などに置いている) 拠点の利用者アンケートから「自分に合った子育て情報や知識が欲しい」「自分のやり方でよいか確認したい」「話をきいてほしい」といった声が多く聞かれた。</p> <p>②区の特徴として、相談は専門家に聞きたいという声が多く、1期から継続して相談員を配置している。今期はそれぞれの相談員に何を相談できるかを利用者にはわかるよう具体的に表現し、案内することができた。 相談内容によってはチームで対応し、必要に応じて迅速に区や関係機関と連携している。 子育てパートナーの配置により、ひろば内相談と制度につなげる相談の役割分担をすることができた。 グループワークなど内部研修も重ねて行っている。</p>			
評価の理由(区)			
<p>①区窓口、訪問等で、広く拠点の相談機能の周知に取り組んだ。 利用者アンケートから、利用者には占める相談者の割合は低いが、必要な方が利用できていることが分かったとともに、相談しやすいと感じている割合は高くなっている。 また、相談者のニーズとして、自らの子育てについての助言や確認を求めている方が多いことも把握しており、その内容を拠点とも共有しながら、引き続き気軽に相談できる場づくりを目指していく。</p> <p>②地区担当保健師と拠点で適切なタイミングで連携できるように体制を整えるとともに、引継ぎが必要な利用者については結果のフィードバックを行い、継続・連携した対応ができています。 また、利用者支援事業と子育て相談の整理に取り組み、区と拠点の役割分担が明確になりつつある。</p>			
拠点事業としての成果と課題			
<p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者との日頃のコミュニケーションや相談プレートの設置等により、拠点で気軽に相談できる環境づくりが進んだ。 ・子育てパートナー配置により、ひろば相談から関係機関へのつなぎを円滑に進めるとともに、ひろばでの継続的な見守りを行うことができた。 ・研修等を通じて、ひろばでの継続支援と利用者支援事業のすみわけが整理されつつあり、利用者のニーズに応じた相談対応や関係機関との連携につながっている。 <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き研修や日々の振り返りの場を通じてさらに事業を充実させる。 ・外国籍の方や養育者以外からの相談が増えている。今後も引き続き関係機関とも連携していく。 			
<p>振り返りの視点</p> <p>ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。 イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。 ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。 エ 区子ども家庭支援課との連携のもと、各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。 オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、区子ども家庭支援課と相談しながら適切に対応しているか。 カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。</p>			

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	子育て世代以外も含めた区民への周知をさらに進めていくため、区民の身近な場所での拠点事業の周知を検討していく。また、地域の情報収集を広げていくため、さらに多くの担い手や他機関と関わっていく。	B	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		B	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		B	B
☆乳幼児健診ワクワク情報コーナー(4か月健診)を運営している。		A	B
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <p>【区アンケート】</p> <p>「欲しい情報が得られる」:利用者84%、無作為76%</p> <p>「ラフルで情報の収集と提供の機能について認知している」:支援者91%</p> <p>「ラフルで情報の収集と提供の機能について活用している」:支援者57%</p> <p>【拠点アンケート】</p> <p>「情報を得るために利用」:H29年度16%→H30年度22%</p> <p>【その他】</p> <p>ラフルHPアクセス数 1期約7,000件/月→2期約13,000件/月</p> <p>ラフルニュース月平均発行部数:1期約3,300部→2期約3,800部、配架先:1期約170か所→2期約210か所</p>			
<p>①情報が溢れる現代、情報に振り回されたり、情報を求め続けたりする養育者が少なくない。こうした状況を背景にラフルでは、利用者との会話の中から、その人の状況にあった情報を、手渡しすることを大切に考えている。</p> <p>②区民へ拠点の各機能の周知を図るために、媒体を選び、露出機会を増やす工夫をしている。</p> <p>③ラフルニュースの編集、ハマハグ登録店舗探しなど、養育者の声を生かす場面で協力を仰ぎ関りを持ってもらっている。</p> <p>☆ワクワク情報コーナーは、形を変えながらも、情報の手渡しを大切に運営を続けてきた。ラフルの紹介、地域情報の提供、4か月児健診に来る養育者の不安や緊張をほぐす役割も担い、これを実現している。</p>			
評価の理由(区)			
<p>①妊娠期から子育て支援情報を広く周知できるよう、区役所窓口、母親教室での案内に加え、情報が届きにくい養育者に対しても、保健師による家庭訪問、育児教室にて積極的に紹介した。効果的な情報提供、整理方法等、拠点と共に検討し、リーフレットの配布、区広報への掲載、関係機関の会議等で周知を行った。</p> <p>②区アンケートから、利用者については8割が「欲しい情報が得られる」と答えており、支援者の9割が機能について「知っている」と答えており、区民への周知は進んでいることが分かった。</p> <p>③区アンケートから、支援者・関係機関の約半数が情報収集・提供事業を活用していることが分かった。引き続き関係機関や支援者、どの機関とどのように連携することが効果的であるか、拠点と検討を進めていく。</p> <p>☆4か月児健診で開設しているワクワク情報コーナーの運用について拠点と検討した。対面にて、個別のニーズに応じた情報を提供する機会となっている。</p>			
拠点事業としての成果と課題			
<p>(成果)</p> <p>養育者、関係機関共に情報収集・提供の機能の周知は進んでいる。また、対面での周知を行うことで、ニーズに合わせた情報を提供することができている。</p> <p>(課題)</p> <p>必要な情報を養育者一人ひとりや各関係機関に的確に届ける方法について区と拠点が共に具体的に検討していく。</p>			

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ さまざまな子育て支援の場に出向いて収集した具体的な情報や、関係機関及びネットワークを通じて得た情報を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 拠点の情報収集・提供機能を幅広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	拠点の様々な事業を通じて地域の関係者と区の子育てについて考える関係ができてきた。今後もこの関係性を更に広げ深めて、子育てで家庭を支援していく。	B	B
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		B	B
☆青葉区独自の特性を踏まえ、ミニ拠点ひろばを開催し、子育てニーズの把握及び、地域での子育て支援におけるネットワークの強化を働きかけている。		B	C
☆子育てサークル間のネットワークを構築・推進し、子育てサークルによる活動の支援を行っている		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)
 「子育て支援ネットワーク連絡会」全体会：年一回(事務局：区、拠点、育児支援センター園)地区別連絡会：年度によって10~12地区(参加人数や規模もその地区に合わせて開催)
 「ラフルひろばmini」H30年度から：3地区4ヶ所9回実施 参加者：434名、支援者16名
 「青葉ひろば会議」：H23年から年5~6回実施
 「おさんぽde絵本スタンプラリー」H28年度から実施
 「青葉区の一時保育・一時預かりを考える会」H29年度から実施。認可保育所、一時預かり事業所の参加 H29年度17名、H30年度20名出席
 サークルリーダー交流会 年2回実施 H30年度は12サークル中10サークル、のべ27名出席、託児32名

①地区別子育て支援ネットワーク連絡会は、事務局が連絡会の意義や必要性を確認し、関係者が顔を合わせて課題を抽出して共に考え合える良い機会となっている。
 「青葉区の一時保育・一時預かりを考える会」は一時預かりニーズの高い青葉区の実態を共有して情報交換する機会となり、健全育成のみならず虐待予防の観点からも重要なことと確認できた。今後も更に検討を重ねていきたい。区内常設のひろばの集まりである「青葉ひろば会議」は各施設の課題や運営の悩みなどを相談し合う場として拠り所となっている。またスタッフ研修交流会を開催し、スタッフのスキルアップの機会となっている。
 ②「おさんぽde絵本スタンプラリー」は絵本をツールとして、親子にいろいろな場所へ出かける機会の提供と、施設との顔の見える関係を作る目的の企画であり、協力施設も増え、拠点のネットワークとして広がりを続けている。地域で活動している方々を「ひろばゲスト」として招き、利用者に地域で多くの人が子育てを見守っていることを伝えている。
 ☆H30年度からはラフルおよびラフルサテライトから遠く、出掛けにくい地区で「ラフルひろばmini」を始めた。
 ☆当事者のネットワークであるサークル同士の横のつながりを作るために「子育てサークルリーダー交流会」を年2回実施。

評価の理由(区)

①子育てネットワーク会議全体会を通して、区・拠点・他関係機関と区の子育て支援の状況と課題を共有した。地区別子育てネットワークを通して、各地区で子育て支援に関するニーズが共有され、地区別子育てマップの作成等の取組が始まりつつある。また、青葉区の一時保育・一時預かりを考える会を拠点と共に開催し、新たなネットワーク構築につなげた。
 ②拠点利用者のニーズに合わせた子育て資源や地域活動を紹介している。
 ③ミニ拠点ひろばで把握されたニーズ(子育て資源の利用状況、ラフルへの関心度等)を共有した。各地区のニーズをふまえ、今後どのように展開していくかについては、拠点とともに検討していく。
 ④サークルリーダー交流会に参加し、子育て支援者によるサークル支援について情報提供を行うとともに、会議後、区と拠点でそれぞれのサークルの現状について共有した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)
 ・拠点と区が連携し、関係機関と子育て支援に関する意見交換等を実施することで、顔の見える関係ができてきている。地区別ネットワークを通じて地区ごとの活動が始まっている。
 ・地域情報の収集と提供により、養育者を地域やサークルへつなぐことができています。
 (課題)
 ・各地区内のネットワークの状況を区と拠点で把握し、そのネットワークを今後どのように展開していくかを検討していく。

振り返りの視点

- ア 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、連携促進に取り組んでいるか。
- イ 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。
- ウ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
- エ 養育者を身近な地域の子育て支援の場につなげているか。
- オ 子育て支援活動に関心のある方を丁寧に受け止め、必要に応じて身近な地域の活動へつないでいるか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・より子育てへの理解を広めるために、子育て当事者以外の区民にも引き続き働きかけていく。 ・中高生などの次世代に向けて、子育てについて考え、学びあえるように働きかけていく。	B	B
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		B	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)
 支援者向け研修:H28年度「子育て当事者が抱えている精神疾患を知る」参加者42名
 H29年度「子どもの貧困とは？」43名 H30年度「スマホのある今どきの子育て」参加者37名
 区民向け講座:H28年度「絵本の魅力・絵本の力」参加67名・H29年度「新春ラフール落語の会」参加13名・H30年度「防災マップを読み込もう」参加9名
 孫まご講座:H28年度2回、H29年度4回(出張開催2回を含む)、H30年度2回
 パパ講座:H28~H30年度、年3回ずつ実施 25~30組/年参加
 ボランティア活動、学生(論文・研究・実習生)受け入れ H28年度 269名、H29年度 267名、H30年度 303名(延べ人数)

- ①支援者向け研修会は、ネットワークを通して得たニーズや、ひろばで感じる疑問をテーマとして取り上げ毎年開催している。また、支援者や関係機関からの相談に対応し、支援者の活動に協力している。子育てサークルの情報を集約した一覧表を作成して広報し、興味のある親子を子育てサークルにつないでいる。また、子育てサークルの課題解決に向け共に考え応援している。
- ②養育者の自主的な活動をサポートし、地域での子育てを応援している。ひろばなどでボランティアをすることで、母親以外の自分を取り戻すきっかけとなり社会参加の一步となっている。パパ講座で共に遊び、製作する中で父親同士の交流が生まれた。父親が様々な年齢の発達段階を知り、他の子と関わる場にもなっている。
- ③子育て家庭を見守る地域づくりの第一歩として、広く区民に対して区民向け講座を行っている。多世代に興味のある内容で実施し、拠点を知らせてもらう機会となっている。祖父母世代に向けた「孫まご講座」を継続開催している。孫の誕生をきっかけに、再び子育てに関心を持つ人々が地域の子育て家庭も温かく見守ることに繋がっている。ヨコハマいきいきポイント対象団体登録をし、シニアボランティアを受け入れている。また、商店会長会でハマハグの活動を紹介し、商店の方からも子育て中の人に声をかけてもらうように働きかけている。
- ④中高生のボランティアや大学生の実習・ボランティアを数多く受け入れて親子とふれあう機会を提供している。拠点見学の日を設定することで、これから当事者になるであろう市民が拠点を訪ねるきっかけを作った。今後も働きかけを継続していく。

評価の理由(区)

- ①拠点と区が相談し合いながら、担い手スキルアップの取り組みがなされ、新規担い手については、区だけでなく拠点へつないでいる。
- ②関係機関などの支援者向け研修を通して、子育ての現状や支援の在り方を検討する機会を設けている。区民向け講座は、企画から拠点と話し合い、周知も行っている。
- ③「地区別子育てネットワーク会議」等で、拠点と共に地域の課題を共有し、子育て世帯に寄り添う体制に取り組んでいる。
- ④中学校、高等学校、大学の実習ボランティアの受入調整を行い、次世代が子育てについて学ぶ機会を提供している。

拠点事業としての成果と課題

(成果)
 ・支援者のニーズに応じて研修会を開催するとともに、養育者には地域情報の提供を行った。
 ・広く区民に向けて拠点の周知と子育ての状況を伝える働きかけを通じて、地域全体で子育て世帯を見守る環境づくりが進んできた。
 ・妊婦を含む次世代に向けた取組について検討しながら実施することができた。

(課題)
 ・子育て世代以外への理解は、他拠点事業と共に連携しながら発展させていく。
 ・シニア層はじめ、様々な世代の区民が子育て支援に関心を持てるように工夫して働きかけていく。

振り返りの視点

- ア 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- イ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- ウ 新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- エ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- オ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- カ 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。
- キ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- ク 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ケ これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	子育てサポートシステムの事業の主旨の周知を進め、良さを生かしたふさわしい預かりを広げていく。	B	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	B
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		B	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)
 援助依頼件数：H28年度224件・H29年度252件・H30年度205件、援助活動件数：H25年度(移管前)5,626より年々増加し、H30年度8,574件
 H30年度援助活動内訳：援助理由1位「常勤就労」(ひとり親家庭の利用含)、援助理由2位「産前産後」。送迎のみ49%、預かりのみ27%、送迎と預かり24%
 【拠点アンケート】
 提供会員アンケートから 希望通りの活動内容で紹介を受けられた：H29年度80%、事前打ち合わせで安心を得られたH29年度95%。
 利用会員アンケートから 依頼通りの内容で紹介を受けられた・事前打ち合わせで安心を得られた、共にH29年度概ね100%

- ①入会説明会の開催を区報で毎月周知するとともに、入会説明会開催スケジュールチラシの配架を各施設に依頼した。開催施設の協力により、提供会員候補と思われる年代が参加するサークル活動等へ子育てサポートシステムの紹介を行った。
- ②利用を希望する養育者の状況に合わせて、入会説明会を追加で開催し出張希望にも対応した。入会后利用を躊躇している利用会員に対して、拠点で行うお試し預かり「子サポでdeラフル」を案内した。
- ③入会説明会時に、子育てサポートシステムが単なるサービス提供ではなく地域の支えあいの良さを大切にしたい預かりであることを伝えて、会員間の関係作りにつなげている。
 会員の声を聞くために利用会員アンケート、提供・両方会員アンケートを実施し、日々のコーディネートに活かすとともに、区支部通信で取り上げて双方の思いが伝わるようにしている。
 提供・両方会員向けに研修会を開催し、活動中での経験を振り返り、学ぶ機会を提供している。
 提供・両方会員交流会は、それぞれ個別に行っている活動の様子を共有し、共感して、知恵を出し合う機会となっている。区支部として活動会員をフォローする場でもあり、安心して活動することにつながっている。
- ④ひろば相談からつながり利用に至るケースもある。子育てパートナーや関係機関とも連携し、養育者の立場に立って広い視野で必要な支援につなげている。

評価の理由(区)

- ①拠点の協力のもと、区職員向け説明会を実施することで理解を深め、必要時に区民への説明と周知が行えた。
- ②幅広い年代の方から協力を得られるように、関係機関に積極的に提供会員募集の周知を行った。
- ③提供会員のスキルアップを目的に、支援者向け研修を積極的に提供会員に周知した。子育てサポートシステム現状を知り、活用方法を検討できるよう、提供会員交流会の様子を係内で共有した。
- ④配慮が必要な方や提供会員からの相談に対し、必要時、地区担当保健師と連携を図り、支援方針を検討して必要な資源につなげることができた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)
 ・子育てサポートシステムの周知が進んできている。必要に応じて、子育てパートナーはじめ、関係者や関係機関と連携しながらふさわしい支援が行えている。
 ・子育てサポートシステムの事業が地域での子育て支援であることを様々な場面で伝えることができた。

(課題)
 ・子育て支援に理解のある提供会員数を増やす取組が継続的に必要
 ・ますます多様化してくる預かりの仕組みの中で、利用者の要求度が増し、提供会員のスキルも求められている。緊急時の依頼をいつまでどこまで受け、次の支援につないでいくのかを区と拠点で考えていく。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 養育者に対して、必要時に利用相談しやすく感じられるような周知活動等の工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに気持ちよく安全に活動できるよう、会員の状況に応じた活動方法の提案や、丁寧なコーディネートができていますか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や会員のフォロー、追加のコーディネート等を行っているか。
- カ 提供・両方会員が活動の意義を感じながら、安心・安全な活動を継続して行えるよう、研修会等の取組がなされているか。
- キ 会員の活動意欲を高めるため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ク 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を促進する取組がなされているか。
- ケ 会員間で授受される個人情報や会員が適正に取り扱うことが出来るよう、注意喚起や研修等の取組がなされているか。
- コ 援助活動の調整等を通して把握した子育てに関するニーズを、必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- サ 専門的対応が必要と考えられる相談について、こども家庭支援課との連携、連絡体制のもと、適切に対応しているか。
- シ 子育てサポートシステム以外の子育てに関する相談に対して、情報提供等の支援ができていますか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	自己評価(A~D)	
	法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	B	C
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。	B	B
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。	C	C

評価の理由(法人)

(主なデータ)

【相談者数(継続相談者数)】

H28年度:380人(83) H29年度:442人(195) H30年度:420人(127)

【相談内容のべ数】

H28年度:837 H29年度:1062 H30年度:1038

【多い相談内容】

①親自身 ②子どもの生活 ③子どもの発育、発達

【拠点利用者アンケート結果】

「パートナーを知っている」H29年度:3%→H30年度:78%

「相談したことがある」H29年度:1%→H30年度:17%

【区アンケート結果】

「子育てパートナーの認知度」:支援者81% 拠点利用者は39%の認知度

「利用者支援事業について」:「知らなかったが興味ある」:利用者44%

- ①拠点未登録者、地域で子育て支援をする方や関係機関から電話相談や情報提供依頼を受けるようになった。毎月の相談者数の約1/3を電話相談が占め、繰り返し相談する方も増え、身近な相談場所として位置づけられてきた。関係機関職員の異動の際には具体的な役割を伝え、活用に結びつくよう継続的の周知が必要である。
- ②丁寧な聞き取りとチームでのアセスメントを実施。複数の選択肢を示し、情報提供を行うことで相談者と共に解決の糸口を探し自己決定ができるように努めている。継続相談は、利用者支援の特徴と捉え、長期的な見守りと相談者に寄り添う支援を行っている。相談内容に応じて、区や他機関と検討し適切な支援実施に取り組んでいる。
- ③相談内容や地域訪問などから得た子育て世代のニーズ、及び地域の状況や課題を関係機関と共有し、今ある資源の活用や必要な資源を考え、地域の子育て資源が豊かになるよう発信に努めている。今後必要な支援、不足する資源の調整や提案に取り組みたい。

評価の理由(区)

- ①妊娠期から利用できるよう、母子手帳交付時の面接や母親教室、こんにちは赤ちゃん訪問、母子訪問等で周知を図った。区アンケートでは、関係機関や支援者へは各種会議の場を活用したため、周知の割合は8割と高い一方で拠点利用者は4割の認知度だった。区アンケートでは、「相談しやすい」の割合は高いが、実際に利用する割合は低かった。また、利用者支援事業について「知らなかったが興味ある」と答えた割合が4割であるため、必要時利用できるよう周知を工夫していく。
- ②毎月事例を検討し、対応の振り返りや支援方針・役割の確認を行ない、タイムリーな連携ができるよう努めた。
- ③拠点と区が連携し、お互いに役割分担しながら相談者の支援が行えつつある。新たなネットワークについては、日々の相談からニーズを把握し、課題分析を積み重ねながら、相談者のニーズに応じた体制について検討していく。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・事例検討時に対応・支援方針・役割分担などの話し合いを重ねることで、個別相談への対応や連携ができるようになっていく。
- ・子育てパートナーが拠点に配置され、身近な場所での相談から関係機関・専門機関につながるルートができた。関係機関や地域の支援者からの拠点に対する信頼度がより深められた。

(課題)

- ・子育て世代の相談窓口としてより広く認知・活用されるようにしていく。
- ・関係機関や支援者とのネットワークを構築し、連携を深めていく。
- ・相談内容の分析により、区特有の課題を明らかにし事業の展開を検討する。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介・支援依頼等について、相談者が円滑に利用できるよう対応をしているか。
また、専門的な対応を要する相談については、内容に応じて速やかに関係機関に紹介・仲介する等、適切な対応を行っているか。
- カ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら継続的な関わりをもっているか。
- キ 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点から振り返りや検討を行っているか。
- ク 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実や、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整や提案につなげているか。